

「明暦の大火後の江戸の町」

長屋門は大名屋敷の大手門から変化してきた様子や江戸の町にどう存在したのかが気になっていました。

先日 NHKプレミアム「英雄たちの選択一火災に強い町へ、幕府の江戸改造」が放送されました。

これを見て明暦の大火（1657年3月2日－4日）後の江戸の町の変化の様子が分かりました。その文脈を簡単に作文します。

江戸開府以来建設されてきた華麗な武家屋敷や豪壮な商人の建



物、江戸のまちの60%ほどが焼失しました、大名屋敷 160 軒・旗本屋敷約 810 軒・町人地 800 町以上が灰塵と化しました。

幕府がそれまで防火対策には熱心でなかったのは、当時江戸の町では火事が起こっていましたが、江戸城まで被害が及ぶことが無かったため防火対策に重点をおきませんでした。明暦の大火

で江戸城（天守閣）が半分ほど炎上し町も焼かれたため、幕府は軍資金を復興対策費として大名・幕臣・町民に資金援助として貸与や給付し、武家・寺社・町人の建物の建設を後押ししました。そして各居住地の再配置を行いました。

江戸城再建にあたり天守も再建するかが問題になりましたが、石垣は前田藩が瀬戸内海から運び建造しました。幕閣は天守の再建は保科正之の意見により停止することに決定しました。

復興に際し資力や労力は江戸の町の建設のために、すなわち民のために使用することとしたという。

この時行った復興の町は、明治時代まで町の作りは大きな変化無しで100万都市として発展しました。

商家では自分の身は自分で守らなければならないことを自覚し、地下式倉庫（地下の穴倉）を金持ちの商家の1/10が作り財産をその中に入れたという。発掘調査で多くの地下倉庫が発見されているという。

時代は当初家康が行った武断政治から文治政治へと時代は変わり、安定した時代には幕府の権威を象徴するための天守は無くてよい時代になっていたのです。

※写真はTVより撮影、文章はナレーションや解説より聞き取り作文しました。